

---

# ヘタリアン・マフィア?

五十嵐 黎兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヘタリアン・マフィア？

### 【NNコード】

N8686V

### 【作者名】

五十嵐 黎兎

### 【あらすじ】

再び、闇の世界に新たな動きが見え始める。始まりは一発の銃声。そして、新たなファミリーの覚醒。三つの呪われた秘宝。激しい抗争の果てに闇の住人である彼らが手にするものとは、そして彼らの運命は？

前作から2年後のお話。『神龍』・『バイレーツ』そして今まで眠っていたもう一つのファミリー。彼らの物語が幕を開ける・・・。  
不定期更新になりました！

c o n f l i c t · o

闇は始まる

男は再び闇に覆われたあの世界を傍観する。

何のために

それは彼自身にすらわかっているのかどうか・・・

血ぬられ呪われた三つの宝玉

それが闇の世界を狂わす

「少しばは我を楽しませてくれるあるか・・・・?」

この世界を憎んでいた男は仲間のために存続を誓い

天性の力によりこれから起ることを予知した男は、愛すべき仲間を開放し

そして

眠っていたもう一つのフューリーが今日覚める

それを待っていたかのよう三つの宝玉の伝承が彼らに知れ渡る

それがこれからのはじめの花幕劇に花を添えるものだと私は知らずに

始まりは一発の銃声だった。

『ションロン神龍』のボス、本田菊はとある病院に駆け込んだ。

またよろしくお願ひします。

一応、設定は前作のまま舞台としては2年後の南イタリアってところでしょうか。

あと、前作解散したロヴィエーノのファミリーは出てこないかと思います。

それから、今作は前作以上に暴力的なところが多いと思います。なにせ別名『抗争編』ですので。

それでは、少しシリアス多めなヘタリアン・マフィア？。よろしくお願いします。

co n f i c t . i 間は赤く（前書き）

さて、いよいよ物語は進み始めます。

が、最初は意味わからないかもしません。書いてる私もよくわか  
んなくなつてきましたw

開けたくない扉など、一年前のあの日以来なかつた。だが、今菊の目の前にそれはあつた。しかしさはいらないわけにはいかない。菊はその重たく感じられるドアをノックし中からの返事を聞いてから中へと入つた。一人部屋の個室。そこに昨日救急搬送された大切な仲間の一人。

「菊さん……」めんなさい、私……しくじってこんな……。

「…………。」

何も言わず、菊は彼女が横たわるベットの傍らにある椅子に腰かけた。行儀のいい彼には珍しく、足を組んでいた。それだけ気がたつているのだろうか。さらにベットの上の少女 鈴梅は罪悪感にさいなまれる。すべて自分のせいだと……。

「あなただけのせいではないですよ。」

「ですけど、私が……まかされたのに……私……。」

「あなた一人で抱え込むことではないと言つてるんです。それに、今回私があなたに頼んだあの件は、たとえ勇珠さんヨウスでも、獅狼くんシラカンでも・・・私でもどうだつたかわからない。危険だとわかつて、それでもあなたに頼んでしまつた。私の力量不足です。判断力にかけてました。結果……あなたにけがを負わせてしまつた。」

くやむその顔を見た鈴梅は、思わず無意識に撃たれた腹部を押さえた。

「違います……これは……これは私が油断してたから……。」

「…………ビビのファミリーも……あれを狙っているわけですね……。にしても……言つてしまふよね。昔から、私はあなたに……いえあなたたちに。“何よりも命を最優先しなさい”と。あんなものにあなたの命をかける必要はありません。その時はだめでも、またいづれ必ず取り戻すことだってできますよね？生きてさえいれば。」

「はい……。」めんなさい……菊さん……。」

表情は変わらなかつた彼だが、室内の空気は若干緩んできていた。

「あの……菊さん……それで……その……」それを……。頼まれていた例のあれです。」

そつと彼女はそつと枕の下に隠していたものを取り出し、それを菊に渡す。

「私撃たれて……でもそれは私から流れた血に混じつて、見つからずに済んだんです……。あ、ちゃんときれいに洗つて磨きましたから……。」

鈴梅に手渡されたそれは、菊の手の中で赤く怪しく輝いていた。丸い宝玉。赤い渦がその中で幾重にも渦巻いている。それこそ、闇の世界を震撼させ、闇の住人たちを狂わす呪われた宝玉なのだった。それを力強く握りしめた菊は、すつと立ち上がつた。

「ありがとうございます。あなたはゆっくり療養に専念してください。いいですね？」

「はい……。」

鈴梅が頷くのを見た菊は、その宝玉を来ていたスーツの内ポケットにしまいこみ、その病室を出た。病室の外には、一緒に来ていた勇洙がいた。

「やはり、鈴梅さんを撃つた輩は、あれ狙いで間違いなさそうです。これが我々の手にある以上、同じ目的でまた誰かが・・・。そんなことはさせません。これは、破壊されるべき対象なのですから。」

「鈴梅はこのままいいんだぜ？」

「ええ・・・輩の狙いは私が所持しています。彼女と私が接触したことなど、すぐにわかるでしょう。そうなればわたしがもつていると考えられますし・・・。さ、アジトに戻つて、鈴梅さんを襲撃した輩の正体解明、やりますよ。」

「了解だぜ。」

二人は、そろつてアジトへと帰つて行つた。

conflict · i 間は赤く（後書き）

鈴梅（台湾です）ファンの方（わたしもだが）撃たれた設定すみません。

でも「うしないと物語は進まないので。

菊は荒げず、静かに怒ってるタイプだと思います。

一話です。

タイトル意味わからないのは気にしないでください何となくなので意味ないです。

それと今回はファミリーとの章で分けてはおらず、『神龍』だつたりほかのファミリーだつたりです。今回は彼らもまた入り混じります。

南イタリア・某所。

男が振りかざしたのは、鉄でできたパイプ。そこらに落ちていたはずのそれは、もともと建築の材料だったはずだ。だが今は、凶器と化してその白銀の軀を真っ赤に染めていた。点々と路地に転がる人。あたりの地面はアスファルトの色ではなくまたもや赤い。パイプから滴り落ちる赤いしづくが点々と道しるべを記していた。パイプを握る手の力が抜け、金属音を放ちながら、それは血だまりの上へと落下した。それを持っていたはずの男は、一切の汚れも、傷もなくただ微笑を浮かべていた。この状況では異常でしかない。薄い金髪。そして風になびく白衣マフラー。手にはめられた黒い手袋の中には、蒼くきらめく宝玉。今闇の世界を震撼させているそのものだ。

「ふふふ・・・汚いよ。ほんと汚い。胃の中にこれを隠すなんてね。せつかくきれいな蒼い色なのにさ。でも、久々にたのしかったよ。君らのその歪む顔。ああ、でももうその顔も見れないね。じゃ、ばいばい。」

マフラーを翻し、その男は向かう。これを持つ主の下へと。

南イタリア・某所。そこにあるのはとあるマフィアのアジト。その屋敷にあるボスの部屋で、アーサーは一人紅茶を飲んで休憩をとっていた。アジトの周りはいやに静かだ。あちこちで争いはすでに始まっている。彼がボスを務める『pirate』も、その争いの渦中には、いる。だが、ここは静かだ。静かすぎる。まあ、ここの存在は仲間しか知らないから当然ともいえる。

「アーサー、報告書上がったぞ？それと、北の方で大量惨殺。それと南西では銃撃戦、それと……。」

「もつとつぐにその話はここに来てるつつの。はあ……本格的になってきやがって……。」

部屋に入ってきたのは、今では右腕ともいえるファミリー幹部の一人フランシスだった。アーサーのデスクの上に新たに書類を重ねている。それらを軽く見ながら、アーサーはある一点で視線を止めた。

「赤い宝玉が……動いた？」

「ああ、それやっぱ喰いつく？」

「行先は……不明？ どういうことだ？」

「もともと赤い奴を隠し持つてたファミリーが最近激しく争つたそうだよ。そのファミリーはほぼ壊滅。その時戦つた相手のファミリーの幹部がもち去つたらしい。でも、その幹部も確かに撃たれただけなんだかで、負傷。でも……その場で赤い宝玉は見つけられなかつたらしい。あくまで噂だけだ。もうほかのマフィアの手にあるつて考えた方がいいんじゃない？」

「そうだな……。あと二つか……どこにあるんだ……。やつと手がかりを得た赤い宝玉も……どつかのファミリーの手の中。また振り出しが。つか、赤い宝玉のありかも引き続き探し出せよ？」「わかつてゐるつての。」

ということは、もつすでに捜索は始められているということだろう。ティーカップを置いたアーサーは、革張りの椅子に深く座つた。はあ……と本日何回目かもわからないため息をつく。あの三つの宝玉それらを手に入れて何になるかはアーサー自身もわからない。何のために俺らは戦うのかさえときどき分からなくなる。毎日毎日ありとあらゆるところから様々な情報が入つてくる。だがそれがすべて真実かどうかはわからない。

「これだからこの世界は…………。」

「面白いよね。」

「…………お前…………。」

いつの間にかあけられているドア。そこに立っていたのは、あの白いマフラーをまとった男。

「…………イヴァン。帰つてくるなら帰つてくるで連絡入れる。」

「入れたんだけどね。なんか連絡付かなくて。」

「まあいいか。しばらくここに居んのか?」

「うん、ずいぶん楽しそうなことしてるもんね。僕もいこの幹部だし、協力するよ。あ、これはほんの手土産ね。」

そうこうで、アーサーのデスクの上に置いたのは、あの青い宝石。

「…………お前…………これをビーで。」

「僕に喧嘩ふつかけてきたマフィアがもつてたから。の人たちは今頃病院かな。運が良ければ。」

「お前…………あんま派手なことすんじゃねーよ。でもま、これが手に入ったのだからよしとするか。」

さて俺はこれをどうしたいんだろうな。

前作では出てなかつたイヴァン現る！－

ほんとはソヴィエトでひとつくりしてもよかつたのですが、あえてここに。

初登場から何してんだろうねあの人は！

水道管じゃなくて鉄パイプなのは現実的にこうかなと・・・。  
現代で水道管つて・・・想像できなかつたので。

最近、どうもカッコよく掛けません。  
気付くとわけわからないお話になってしまいます。  
それとアップするの遅れてしまふません。

「さやかな声。それが響き渡る観光地。そこに、一人の男が紛れて歩いていた。平穏な風景。楽しげな声。客を呼び込む店の店員の声。道で演奏しているストリートミュージシャンの歌声。何もかも自分には異常に見える。なぜなら彼は闇の世界の住人だからである。常に戦いと隣り合わせの生活を送っている彼にとってはこっちが非日常なのだ。

「マジウモ・・・的な?」

彼はそう呟き、そのにぎやかな世界から逃れるように裏路地へとはいって行つた。ふと、そこに踏み入れたところで足が止まつた。何も変わらないただの路地。だがそこに染み付くのは血のにおい。ここで何かあったのはわかる。だが今は何もなかつたかのように普通の道となつている。眉をひそめつつ、その男、劉獅狼(リウ・シラウ)は再び歩みを進めた。ボスからの任務の帰り、ふと立ち寄つたその街になんの思い出もないのだが、なぜか足が向かつたのだった。そしてここにたどり着いた。血のにおいはする。だがそのものはあとかたもない。既に処理は済まされた後のようだ。おそらくここで抗争があつたのだろう。自分が所属するファミリーは関係していない。でなければ今頃自分のところにも何かしらの情報があるからだ。ということは違うファミリー同士の抗争ということになるのだろうが……。

「あれ絡みつかね・・・。ボスに一応報告する・・・。・・・。  
・・・。」

ふと、そこで気配を察した。実は数分前から付けられているのはわかつっていた。だからこそこんな路地に入ったのだともいえる。後方

およそ5メートルのところの壁に身を潜めている。数は一人か・・・。連絡するのを装い、懐に忍ばせた銃に手をかける。面倒事は起こさないほうがいい。変に荒げたらボスに迷惑がかかる。じゃなくとも最近はあれでもピリピリしつぱなしなのだ。適当にあしらつて隙を見てこの場を去るしかない。しかし、そんなことを考えていた獅狼の考えはもろくも崩れ去つた。いつの間にか、その気配が消えていたのだ。獅狼は銃を片手にその壁の影へと向かつて走つた。角に来てそのほうへ銃を構える。だがその場所に人の影はなかつた。

「なんだつたんだ・・・。」

念のため銃はいまだにしまわずに、その場にたたずむ。だが、これ以上この場に誰かが現れることはなかつた。獅狼はようやく銃をしまい、その場を立ち去つた。警戒は解くことはしない。

そんな獅狼を近くのビルから監視する一人の人物。

「あの人行動・・・意味わかんないんだけど・・・。」

「帰るよ・・・。」

その人物の頭上には黒く小さな鳥が旋回しながら飛んでいた。

その男の声にその鳥は彼の肩の上に止まつた。そしてその男はそのままビルの中へと姿を消したのだった。

余談としては獅狼が訪れたのは前回イヴァンが暴れてたあの場所です。

そして監視する人物・・・誰でしょうねw

彼が表立って現れるのはもう少し先になると思います。

ところ」とことで、今日から火曜・金曜更新になりますー。

後、若干キャラ崩壊っぽいです。若干ですけど。  
それと今回は少し長いです。

横長の椅子、それに横たわり天井からの明かりに赤い宝玉をかざして見つめる菊は、視線をそれだけに向けていた。『神龍』のアジトにはいま菊しかいない。全員出払っているため、アジト内はとても静かだった。ここはバスの部屋。ふと・・・頭に疑問が浮かんだ。

「私は・・・誰からバスを継いだんでしたっけ・・・。」

2年前。自分はこここのバスになることを決めた。だがその前までは自分は幹部だった。つまりバスはほかにいた。でも、それが誰だかわからない。思い出せない。

「思い出さなくてもよい・・・といつことでしょうか・・・。なぜ私なんかに・・・。」

自分がボスになると決めた理由は定かなのに・・・。

「我がそ、暗示したからあるよ。」

「！・・・あなたは・・・。」

いつの間にか、部屋のドアの前に男が一人立っていた。黒い髪は肩の上で結わえられ、黒い双眸は鋭くも柔らかい印象だ。菊と同じ黒スーツに身を包んでいる彼は、ふうっと煙管の煙を口から吐き出した。横になっていた菊はすっと体を起こし、立ち上がる。彼との面識はない。だが、前にもこんなことがあつた気がするのだ。最近ではない。もつとずっと前。

白煙が揺らめく。彼の動きの軌跡を残して。気がつけば、その男は

菊の田の前にいた。

「つ・・・・・！？」

「久しぶりあるな、菊。」

その時、菊の頭に過去の記憶がよみがえってきた。そうだ、この人こそこの人の……。

「王・・・・・さん・・・・？」  
（ワシ）

「思い出したあるな？まあ、久しぶりとこつておくある。ちゃんとこの世界にいるのを見て安心したある。しかしまあ・・・面白くなつてきてるあるな。たかがそんな宝玉で、殺し安いしてあるからな。」

「久々に現れたかと思えば、いきなりそれですか？あなたはもう関係ないのではないんですか？」

「そうある。私は一切手だししないある。だからたとえ菊、お前が殺されようとも私は何とも思わないある。この腐つた世界から人間が一人消えたこと・・・それだけある。」

菊の傍らを通り過ぎ、長椅子の肘置きにもたれかかる。瞳を伏せ白い煙を口から吐き出す。そして開いたその冷やかな瞳で菊をとらえる。彼が放つ次の言葉を待つように。

「・・・・・・・・・・・・私は・・・死にません。いえ・・・死ねません。あなたからここを継いで一年。様々なことが起こりました。とても表立つて言えないようなことも、何度も何度も。私は、先だって何かをする。誰かを導く。それらを得意とはしません。今も、勇珠さんやほかの皆さんに頼つてしまつ。ですが、それでも・・・私はこここのボスなんです。彼らの親でもあるんです。私は彼らを守らねばならない・・・いえ守りたい。守るんです。ですから・・・

死にません。彼らの成長を見届けるまでは……。」「

そう言つて菊はそばの壁に掛けてあつた刀を手に取る。柄を握り、さやからその刀身を抜き出す。白銀にきらめく刃。薄暗い室内でも、それは怪しく輝く。この刀はずつと昔、自分がここに入る前から持つていたもの。といつてもそんな幼いころではない。10代後半のころだった。あの頃は今思い出すと恥ずかしいが荒れに荒れていた。人殺しでさえ平氣でやつていた。その人と手を組んで。

「私がどんなにここを嫌つても、私の居場所はここ。私がどんなに守つても、それは裏を返せば人を傷つけている。この世界は矛盾だらけなんですよ。表の光あふれる世界も矛盾だらけ、でもここは・・・矛盾していてそれでいて・・・淡泊。奥が深いようでいて実はわかりやすい。そんなせかいです。王さん、あなたはもうこの世界と関係ないんですよね？」

「世界と関係ないとは言つてないある。お前と『神龍』と関係ないつて言つたある。」

「・・・では・・・関係ないといつことで・・・。」

菊はそう言つて、王のほうに刀の先を向けた。

「何の真似あるか？」

「今後、私はあなたを他人として認めます。もしあなたが私の家族に手を出した場合は・・・あの時の比ではないですよ？背中ではなく・・・あなたの息の根を止める・・・。」

「その日・・・あの時の日あるな。安心しろある。私は傍観者。手も何も出さないある。せいぜい・・・我を楽しませてみろある。」

王の姿は煙にまぎれて消えた。菊は静かに鞘に刀を戻す。そして、刀を握りしめたまま、菊は壁に寄り掛かるように体を傾け、そのま

まざるまざると力を抜くように座り込んだ。顔を覆つむつて手を置き、嘲笑うような笑いをこぼした。

「つははははは・・・・・樂しませりですか・・・・・。何も変わらない。あなたも・・・・・私も・・・・・の人もそつ・・・・・今もまだこの世界にいる・・・・・。何がしたいんですか・・・・・この世界で・・・・・死にたいですか?生きたいんですか?・・・・・馬鹿らしい・・・・・そういう私も馬鹿ですけどね・・・・・ふつはははは・・・・・。」

「どうどう壊れたんだぜ?」

「・・・・・いえ・・・・・?面白くお客さん!、しばし挑発されましてね。」

「

仕事から帰つて来ていた勇洙が菊のデスクに書類を置きながらたずねていた。

「・・・・・・・・・・・兄貴・・・・・・何がしたいんだぜ?」

「お会いになつたんですか?」

「・・・・・・・・・・・盗み聞きの起源は俺なんだぜ。」

「・・・・・なかなか悪趣味で。さて・・・・・行きますか。」

「休ませろだぜ。」

「前々から行つてありましたでしょ?行きますよ。ファミリー漬

しに。」

「了解だぜ。」

彼らはアジトを出で、闇へと溶け込んでいった。

出す氣はなかつたんですが・・・にーに・・・。  
出てきたよ・・・。

あと菊がふつははははとか笑つてゐるの自分でも想像できませんw  
ふつははははでもキャラ崩壊に含まれますかね?  
やや菊の過去を垣間見せつつ・・・にーにのポジションは好き。  
なにもしないけどでも他人を混乱させる?みたいなそんなのが・・・  
にーにはたまいでてくるかもしませんw

## ? character introduction? (前書き)

ここでは、『神龍』と『pirate』の人物紹介を載せます。  
前回の人物紹介に多少加筆しています。が、基本変わりません。  
もう一つのファミリーは小説に登場次第、新たに載せようと思います。

『神龍』メンバープロフィール

『神龍』元幹部・現ボス 本田菊・・・マフィア界を嫌っている男。数年前にボスであった耀を斬り、そのままアジトを飛び出して以来裏社会には関わらないようにして生きていた。だが、耀に呼び出されそこでボスを継ぐことになってしまった。耀の過去を知るただ一人の存在で、また『神龍』創設に力を貸したこともある。耀の右腕でもあった。平和主義な性格であまり抗争などには現れないが、こちらが危機に陥った時は、自己防衛という名目で抗争に参加する。法律で禁止されているが、日本刀を所持し、それを用いて戦う。ボスとして一年過ごし、彼の中でこの世界に疑問が生じている。赤い宝玉所持。

『神龍』幹部 任勇洙・・・天真爛漫な元氣幹部。耀のことは兄貴といつて慕っているが菊のことは嫌っている。というか認められない。なにかしら菊のせいにして、仕事も菊に押し付ける。（とくに書類整理など）だが、何があると菊を呼び出す。それと起源主張というわけのわからないことをする。戦う時に菊の悪口言うのは癖。また獅狼とはいライバルで、鈴梅とは言い口げんか相手でもある。戦うときは主に体術だが、その場に応じて槍やトンファ・などの武器を使用する。菊がボスに着いてから、右腕として動いている。だが相変わらず菊に対する悪口と起源主張は減らない。

『神龍』幹部 劉獅狼・・・勇洙とは正反対なクール幹部。『』的な『』が口癖。基本耀も菊も嫌いじゃない。勇洙とはときどき力を競い合う仲。ちょっとした理由で最近まで刑務所の中にいた。基本口数少ないので、空気になりがちだが、ことを起こせば即立ちたがり

屋。 というか目立つような行動を起こす。 爆竹を使うのは日常茶飯事。 主に爆竹やダイナマイトなど、 火薬系の武器を使う。 が、 それだといざーーという時に使えないの、 拳銃も同時に扱う。

『神龍』幹部 鈴梅<sup>レンメイ</sup>・・・数少ない女ファミリーの一人。 菊を慕う気持ちはだれにも負けず、 あんなことがあつた後も菊を決して責めず、 自ら力になりたいと思つてゐる。 耀のことも慕つてはいるが、 菊のことになるとたとえ耀にでも反抗する。 勇珠は菊のことやその他のことによく口げんかする。 菊同様あまり戦いには参加することはないが、 戦うときは三節棍を用いて戦う。 宝玉をめぐる抗争で何者かに撃たれ、 現在はとある病院に入院中である。

### 『P i r a t e』メンバープロフィール

『P i r a t e』ボス アーサー・カーランド・・・不思議パワーを持つ男。 部下をけなすような発言が多いが決して大切にしないわけではなく、 ただ人付き合いが苦手なだけ。 フランシスとは腐れ縁で、 喧嘩仲間。 少々（？）秘密が多いが、 部下は誰もその秘密を知らない（と、 アーサーは思つてゐる）。 それはかれが自分ひとりで何とかしようとして誰にも相談していないからである。 が、 実際はバレバレなので、 いつ相談に来るかな とフランシスは思つてゐる。 武器は主にけん銃や剣など。 後不思議パワー（笑）。 それと料理も武器になるという変な体质である。 本人にその自覚がないのでよくファミリー内で負傷者が出る。（怖ーー） 今もボスとしてファミリーを引っ張る。 何事も慎重に行い、 抜け目はない。 青い宝玉所持。

### 『P i r a t e』幹部 フランシス・ボヌフォワ・・・仕事中でも

ナンパしちゃうお兄さん。アーサーとは腐れ縁でもある。仕事中ナンパしてはアーサーに怒られている。が、本人に反省はなく、いまだにそれは治っていない。そんななので、フランシスに仕事を任せると一向に片付かない。なぜマフィア、しかも『Pirate』にいるかは謎。というかこの人はなにしたいのかが謎。アーサーをおちょくるのが最近のブームになってきてている。アーサーの過去を知る数少ない人間の一人。武器は主に銃を使う。

『Pirate』幹部 イヴァン・ブラギンスキ・・・あまりアジトにはおらず、陰ながらにファミリーに協力する。言葉や表情からは想像できないほどの残酷な面も持つ。どんなに血が流れようと、顔色一つ変えず、にっこり笑っている。巷では死神とさえいわれるほどで、彼と戦つて無事ですんだものはアーサーとほか一人しかいないらしいが、その一人が誰なのかは誰も知らない。とくにアーサーも彼には指示を出さない。というより、イヴァンのやりたいようにさせているという感じである。武器は鉄パイプなど何でも使う。

あー難しい・・・あー難しい・・・

シリアルスというか・・・ちょっとまじめな感じの話を書くのが難しいです。

「どこまでも広がる果てなき世界。それは人ある限りどこまでもどこまでも広がっていく。終わることを知らないかのように、終わりなどないと主張するように。

そこに僕は一人立っていた。

下に広がるは水面。でもその色は濃く深い赤。いや、みよによつては黒い。そう見えるほどの異様な水面。その上に沈みもせず地面に立つよつとして僕はいた。

一歩。踏み出した。丸い波紋が遠くまで広がる。

「こつになつたら」から出られるんだよつ・・・・・。

何度も呟いただるつかもわからぬその言葉。

もうかれこれ、5年は此処から出られていない。

だからこの外の世界で何が起きているのか、自分はどうなっているのか

知りたくて

もがいた。

もがいてもがいて・・・

ようやく出れたのに

出たその先も真っ赤だった。

その中に、まるで悪魔のような男が立っていて見覚えのある青い玉を持つていた。

思わずそれに手を伸ばしたけど

それは僕の手をすりぬけた。

違う・・・・・ぼくの手がそれをすり抜けた・・・・・

血だまりの中僕は立ちつくした

まだあそこにいるんだと・・・・・

本当に出れたわけではないんだと・・・・・

出してよ・・・・・

何でよ・・・・・

意味わかんない・・・・・

次に外に出た時、ある一人の男が路地に入つていいくのを見た。

その男はとある路地でしゃがりへ立ちはつて、しゃがりへじてはつとしていた。

何をしてるのかがわからない・・・

するとその時、その男がいきなり自分のほうを向いた。

おどろいてその拍子に

またあの黒てなき世界にひきかえつてしまつた。

ああ・・・

まだ僕は・・・

「此処にとらわれてるんだ・・・。」

水面の上、僕はひざを崩してその場につづくまつた。

新たにしづくが水面に加わって波紋を作る・・・・・

レースでできたカーテン。それをさわやかな風が上へと吹き上げる。その部屋に置かれたベットの上には、一人の少年が眠っていた。そのベットの傍らには一つの鳥かご。その中には小さな黒い鳥が静かに止まっていた。そしてその部屋の出窓に腰掛ける一人の青年。その青年は、ただ窓の外を見つめていた。無表情というふわわしい

顔つきで、ただ外を眺めていた。

「もう五年たつ……早く起きる……じやないとあんじがつを  
い・・・。」

だが、その青年の声は少年にまだ届かない……

あれ・・・あれです・・・。

最後のセリフで青年は誰だか分りますよね？はい、その人です。  
で、寝ている少年も誰だか分りますよね？

ついに彼らが動きます・・・

動きますが・・・どうも言葉がもどきになつてます・・・

少々暴力的な感じです。あと内容的には浅いのです。  
そんなに話も進んできません。

会話もなく、登場も彼一人だけですし···  
あ、そうでもないですかね どっちだ

力強く置く場をかみしめ、短く息を吸つて地を蹴る。握りしめた古風な剣を構えたかと思うと、それは次の瞬間には相対する人に斬りかかっていた。うめきながら、その人物は地へと伏す。剣を携えた男はさらに止まることなく、その後ろにいる人物にも切りかかる。噴き出す血しぶきが彼のほほに赤い点を描く。剣の刃に付着した血をふるい落とす。だがそれはまたすぐに赤く染まる。ようやく彼が止まつたのはそれから5分がたとうとしていたころだつた。剣を鞘におさめ、はあつとたまつっていた息を吐き出す。茹だるげに前髪をたくしあげながら、アーサーは自分のほほに付いた血に気がついた。短く舌打ちし、それを手の甲で拭う。

「つたぐ・・・ふざけんじやねーよ。何が楽しくてこんなやつらどんどんぱちしなきやなんねーんだつつの。」

ここはもう何年も使われていらないであろう廃工場。用事で出かけたアーサーだったが、ふと付けられていることに気がつき、わざとこの廃工場に来たのだ。そしてアーサーを尾行してきていたどこかのマフィアの下つ端は完全に伸びていた。死んではいけない。ひどくて重症だらう。重体という診断を受けないだけましだ。それに彼らも闇の住人。普通の病院になど世話にはなれないだらう。いい闇医者の知り合いがいればいい。そんなことを考えついてアーサーはふつと短く笑みをこぼした。我ながら馬鹿らしい考えをしたそう思つたからだ。そういう自分も致命傷を負つたらどうなるのか、あてなどないのだ。

廃工場を後にし、アジトに戻つたアーサーは剣を自室の壁に立てかけると、スーツの上着とネクタイを取つて、そのまま寝室に行つ

てベットに飛び込んだ。そしてすぐ後悔する。せめてシャワーでも浴びればよかつた。おかげでベットにもあのいやな鉄に似たにおりが移つてしまつ。だがもう体を動かすことさえしたくない。思つてもなかつたあの戦いのせいで疲れがどつと出てきた。もう、今日の仕事でさえ終えられるのか分からぬ。休みなど会つてないようなものなのだ。たとえ部下に休みをとらせても、自分は休みなど取らないことが多い。3時間眠れるならいい方だ。昨日は1時間も寝れなかつた。寝る暇すらなく、抗争。そんな生活が最近多くなつていた。それもあの青い宝玉を手に入れてからである。そして思う。あれが抗争を引き寄せているのではないだろうかと。それはあながち間違つてはいないだろう。なぜなら、あの青い宝玉を狙つて抗争は起きたのだからである。あの青い宝玉にそつさせるほどの価値があるのか、アーサーは知らない。知つているものなど、この世界にはいるのだろうか。そんなようにも思つ。アーサーはいつの間にか夢の世界へと旅立つた。

一人の男が、とある小さな三階建てのビルの前に立つていた。じつと、入口の前に立つてゐる。そして、意を決したかのよう歩きだし、入口付近にあつたセキュリティーシステムの指紋認証とパスワードをクリアし中に入つて行つた。そこが『神龍』のアジトだと知る者は少ない。

次回予告的なものをはじめてみる。

（次回）

『神龍』のアジトを訪れた一人の男。彼を迎える菊の思惑とは・  
・  
そしてその男とは・・・『神龍』に新たな動きが・・・?  
・

になるだろうと思います。

すみませんでした。  
何とかなりました。 本田夜にむつ一話更新いたします。

（一月前）

ある男はその日、家で静かにしていた。何もあることがないわけではない。ただ、虫の知らせ……とでも言つのか何かがあるそう思つたのだ。口に呑んだいれたての「コーヒー」の苦みをかみしめつつ、ただ何かを待つていた。

一時間ほど経ち、気のせいだと思い腰をおろしていたソファから立ち上がつた。そして外の空氣でも吸おうと部屋から出て行こうとした時だつた。部屋の中に置かれた携帯電話が、震えた。どれはすぐ震えるのをやめたためメールであることが分かつた。ドアから半分で書いていたその男はすぐに携帯電話のもとに向かい持ち上げた。操作し、今来たメールを開く。差出人のその名は……

「『神龍』……ボス……菊？」

from : 『神龍』ボス  
××/×× 10:39

題 :

お久しぶりです。お元気でしょ？

最近お話を聞きませんが、

『じつやう』の世界から足を洗われたそうで……

そなあなたにこのようなお話を持ちかけるのはいかがなつかとも思いますが

一度お会いできないでしょうか

返信はいつません

もしよろしいのなら一ヶ月後の今日  
私のアジトへいらしてください  
入口のセキュリティおよびパスワードは  
あなたの知るときのままです

では、お待ちしております。

本田菊

「一ヶ月後?」

なぜそんな先の話を今してくるのだろう。確かに彼はまじめだ。  
だが、それでもこんなにも早く約束を取り付けるよつな相手では自  
分はない。とするところの一ヶ月の期間というのは、菊側で何かがあ  
るということだろう。これから一ヶ月忙しくなり、約束をする暇が  
ない。だからその前にこうして彼らしくもなく携帯のメールなんか  
で約束してきたのだろう。でなければ、律儀な彼のことだから、長  
々しい手紙でも送つてくるか、電話で直接となるだろう。

男はしばし、メールを見つめ、その後携帯を置き去りにし外へと出て行った。その口元にほのかに笑みを浮かべながら。

余談ですが、メール打つのにあたふたしてゐる菊が可愛いと思つ。あくまで私の妄想の中です。 実際にそういうことはないと思いますが・・・。きっと神業の「J」とく字を打ち込むんでしょう・・・。w

きっと絵文字を使うのに「キドキ」してゐるに違いない。私がこんな絵文字なんて・・・って思つてほしい・・・すみません自重します。USB見つけました。今さつきマペン立ての奥底になぜか入つてしまつた。今度からじつかりしまつります。（当たり前です）

さて、男の正体は・・・

男は、アジトの奥へと続く長い廊下をゆっくりと歩いて行った。ボスの部屋は一番奥だということは知っている。もつ何回も来たことがあるそこは、どこに何があるのかすら手に取るようにわかつていた。薄暗い屋内、だが陰湿さは微塵もない。それはボスの気質からだろうか。なぜ彼が自分を呼び出したのか、それは男自身わかるようなわからないようなそんな感じだった。もう自分は子の世界との関係を絶つた。いや、絶たされた。だからこそ、もうこの世界のだからも連絡はないものだと思っていた。それなのに、突然送られてきたメール。そのメールが一体何の意味を持っているのかすべてはこれから明かされるだろう。男は一番奥にある両開きの豪勢なドアの前で立ち止まつた。一呼吸置いてから、くいっとややすれかかった眼鏡を正し中へと入つた。

以前来た時にはその室内には独特的の空氣に包まれていた。それは前ボスが焚いていた香の香りのせいでもあつた。だが今は全く何もない。男は部屋の中央へと向かつた。そこに置かれた長椅子。それに市制よく腰掛けている黒髪の和服姿の男。彼こそこのボスであり、あのメールの差出人、本田菊だつた。

「よくお越しくださいました。いらしてくださり感謝しておりますよ」

「ほんとはどうしようか迷つたんだぞ」

「ええ、ですから返信無用で、あなたの『自由にならぬ』にしたんではないですか？」

「そうだぞ。で、俺に何か用かい？」

「この世界に、戻つてくる気はありませんか？」

「え……？」

「アルフレッドさん、私があなたを呼んだのはほかでもありません。

『神龍』に……入りませんか？』

男

アルフレッドはその言葉に、目を丸くした。一度『pirate』に所属し、その後フリーの情報屋をしていた。だが二年前『pirate』のボスにこの世界からある意味追放されたのだ。その自分を『神龍』に入れる？何を考えているのだろうか。

「ちょっと待つてくれよ。どういうことだい？だつて俺は、『pirate』の一員だつたんだぞ？そんなよそ者をなんで……」

「くすっ……おかしいですか？」

「おかしいとかじやなくて……俺が裏切るかもしぬないって言つてるんだぞ」

「裏切るんですか？どこに？」

「ツ……」

「構いませんよ。この世界はそつでしょ？裏切つて裏切つて。ときには仲間を売つて、仲間をだまして、仲間を殺して自分が生き残る。自分の主だけを生き残らせる。どこまでも卑劣で愚かで……。そんなことを覚悟しなければ生きていけませんよ？誰がどうしようと私は知りません。ただ……私の大事なものを傷つけられるのだけは許せません。ただそれだけです。」

一度、最後の言葉を放つた一瞬。菊の瞳に影が生じた。漆黒の闇夜を思わせるその瞳が、さらに濃く深い闇の色をした。さらに空気がその時だけぐんと下がつた。だがそれもすぐに消え、今はいつもと変わらぬ菊がいるだけである。

「私のやり方と、あなたが以前までいたところのボスのやり方は違うと思います。それに慣れるまで大変かもしれません。私もそうでしたし……。それでも……頼めますか？」

「…………わかつたんだぞ」

「では、これからよろしくお願ひしますね」

「ねえ、菊」

「はい?」

「今、私もつて言つてたけど……どうこいつ意味だい?」

「……それはまた今度……とこいつ」と

菊はそつこいつと立ち上がり、アルフレッドを連れその部屋を後こうした。

ところで、アルフレッド復活？

アルフレッドのキャラ紹介は新たなファミリーが登場後そちらと合わせて載せようと思います。

♪次回予告♪

（前回忘れてましたねw）

南イタリアでも北に位置するところにある一軒のマフィアのアジト。そこで、一人の男が目を覚ます。それは新たな抗争の幕開けとなる

やつと彼らが動かす。

南イタリアでも北方にある町。そこにもとあるマフィアのアジトがあつた。はたから見たら普通の洋館。だがそここそ闇巣食う館なのだ。その館の一室は、談話室のようになつていて、落ち着いた色彩のソファや、木製のテーブル、アンティーク調の家具が並んでいる。その部屋の中央にあるテーブルに、一人の少年にも見える青年がおでこをひつづけていた。慣れない仕事をして早五年になるが、やはりまだ慣れはしない。

「大丈夫け？」

「ど……どうでしょうかね……。こんな大変だとは思つてなかつたです……若いのに、こんな仕事してて……」

「それが原因かもしんね……」

「ですかね……」

「そんでも……早く起きたほうがいい……」

「そうですね！みんな……あの日からどこか元気ないんですね……ダンさんも……ノルも……どこか無理して見えるんですね……平氣な顔装つてゐるつて言つた……」

あの日から、まるで空に雲がかかるようにみんなほんとの思いを隠してしまつた。ほんとは心配で心配で、くるつてしまつほじなのに、それを隠す。いつもどうり、平常なままだと偽つて……変わりなく過ごす。でもそれがかえつて不安を仰いでいるようにも思えて息苦しくなる。此処が一番安心できる家なのに。

「IJのままじや……僕らどうなるんですかね……。僕もいつまでもアイス君の代わりしてゐるわけにはいかないですし……」

「ん……」

「…………『めん…………』」

「えつーー?」

「…………」

声がするほうへ、二人が振り向く。その部屋のドアが開き、そのあたりの壁につかまりながら危うく立っている少年がいた。長い間寝たままだったためか、その肌は青白く、足腰は弱っているようで今にも倒れそうだ。

「ア……アイス君！？」

「目……覚めたか？」

「うん……心配掛けてた……ごめん……もう大丈夫……。ティノ……僕の身代わりしてくれて……その……」

「いいよいよ！アイス君が起きたんなら、もうですよねベールさん！」

「んだな」

「もう始まってる……呪われた宝玉を奪い合つ争いが……」

そういう、アイシーリアの手のひらの上には白銀の世界を思い起しさせる純白の宝玉が握られていた。

うわああああああああああああああああ  
スーさん難しい！アイス君がアイス君じやない！！

あ、ようやく出てくれました。方言無理な北欧です。方言頑張つてるほうです。が、たぶんもじきです。翻訳サイトをうまく活用できません。orz

それと人名にしてるので、北欧も人名ですが、スーさんとフィンは一応公式？のを。で、それ以外の三人はオリジナルです。最後にアイシーリアって出ましたし……。ほかの三人は、私の書いていたほかの小説からそのままパクつきました。

アイスランド アイシーリアです。略してアイスって呼ばれますね。ほかの一人は出てきたら表記します。  
さて、ここはファミリー名を考えねば……

重大なミスを犯しました。

宝玉の色間違えた！！

縁ではなく白でしたorz

前回のはすでに修正済みです。すみません！！

小説レイアウトの色は宝玉の色にしたのに……

ああ、ばかですみません。何回も謝ります。

久々に起きたアイシーリアは、ふと部屋中を見渡した。それから再び一人へと視線を戻す。

「どうかしたの？」  
「ダンと、おに……ノーレはどこ？」  
「二人なら仕事出てかけたよ」  
「そう……僕が起きたこと一応伝えといて。あと……これから人と会うから、僕の部屋に近づかないでもらつていい？」  
「え……これから？」  
「うん」  
「……」  
「何……ベール？」  
「ベールさん、身体大丈夫かつて思つてるんですよね？」  
「ん……」  
「心配しないで……もう大丈夫だから。じゃ、そろそろだから……」  
「なにかあつたら叫んでね！」  
「叫ばないよ。でもわかつた」

アイシーリアはそういうと自分の部屋に入った。綺麗に掃除された部屋は、五年前と何も変わっていなかつた。しかし、その部屋は無人ではなかつた。黒いパフайнはいつも通りいるのはいい。だが今日は先客がいた。出窓に腰掛け、己の煙管を咥えている。赤い中華服に身を包んだ男だ。部屋に入つてきたアイシーリアを見て、男はふつと笑いをこぼした。煙管を口から離し、足を組んで座りなおす。

「よつやく田覓めたあるか？」

「だれのせい？」

「我のせいあるな。相変わらずやつある」

「貴方でしょ、あの宝玉を解き放つたのって。ビックリわけ？意味分かんないし」

「この面白みのかけらもない、この世界に変革を起すかと思つたあるよ」

くくくと笑うその男の口から、煙管の煙が吐き出される。そしてじっと、アイシーリアのほうを探るような視線でつかがつている。

「この世界はずっと平行線ある。馬鹿みたいに暗躍して、同じ結末を迎えるある。だから新しい刺激でも与えてみようっていう我的考えある。お前が目覚めたのも、そのせいかもしないあるよ？」

「そんなことない……そつか……僕が起きてたら絶対に反対して邪魔すると思って……それで、眠らせたんだ……」

「よつやくわかったあるか？だが遅かったあるな。ボスとしてあれを守る」とを宿命づけられてたのに、それができずにほかの赤と青はほかのやつの手の中ある。……まあ、運命はすでに動き出しているあるよ。お前はどうするあるか？」

「…………」

白濁した宝玉を手に言葉が出ずにいたアイシーリアの肩をぽんと叩いた王耀はそのままその部屋から立ち去つて行つた。

北欧ファミリーの名前はまだ未定のままです。すみません、いいのが思いつきません……もうしばらく出でては来ません。

あ、北欧ファミリーのボスは読んでわかりますかね？アイス君です一応。

あんことアイス君で迷つたのですが……アイス君で行つてみよう

……右腕はなると……やっぱノルになるんですかね？うーん、北欧はいろいろ悩みます。そしてなぜに耀がでてくる…？出しゃばりなんだなきつと

そして二人しかアジトにいないときはお兄ちゃんつて呼んでもるとすごくいいなつて思つんだけビアイス君。（自重してよ意味わかんない。）はいすみません。

～長くなつたけど次回予告～～～（時々予告の存在を忘れる…）

雷雨の中、因縁ともいえる一人が相まみえる

一人は突然の再開にうろたえるが、もう片方は冷徹に笑う

己をして相手を

すべてはその田と同じ雨の田に始まつた……

サブタイトルが適當……

曇天の空に時々閃光が走る。稲光のうちに、大きく轟く雷鳴。だがそれもすぐに僧都しい雨音に打ち消される。朝から続くその土砂降りのせいだ、アスファルトの地面には大きな水たまりができる。そんな道を、本田菊は一人歩いていた。鈴梅の見舞いを終え、さらにいくつかの用事を終えて帰るところである。傘から滴る雨粒と、歩くたびに跳ね上がるしづくが、彼のスーツを汚していく。傘が天空を隠し、視界が半分になっている。此処で敵に遭遇したら反応が遅れるだろう。武器の日本刀は布でくるみ肩から提げている。それも今は傘で外からは見えてはいないだろう。来るならいつでも来るがいい。そんな考えを抱きつつ、菊は雨にかすむ街並みを眺めていた。

一定の速さで歩んでいた足が突然止まった。数メートル先の路地。そこへ入っていく一人の人影を見かけたからだ。それが、昔の知り合いに似ていた。しばし躊躇した菊だったが、その人影の後を追うことにして、そのまま路地へと入る。せまい路地で、両側を建物に囲まれ、その先はさらに薄暗い。闇へと続く道とでもいえる。そこに、先ほどの人影がいた。走ってきたのか、ずいぶんと意氣が上がりついて、建物の壁にもたれかかっていた。雨のせいで、菊の足音がかき消されているからなのか菊が近づいていても気付く気配はない。こんな土砂降りの中、息が上がったその人物は傘すらさしてはいなかつた。

「こんな土砂降りの中、マラソンでもしてたのですか？」  
「…? ……おま……えは」

声をかける気まではなかつた菊だったが、思わず声が出てしまつた。菊の声でようやく自分がここに一人ではないと把握したその男

は、顔をあげて菊の姿を見た途端、そのエメラルドグリーンの瞳を丸くさせた。

「お久しぶりです。『Pirate』ボス、アーサー・カーランドさん？」

「菊が……なんでこんなところ……？」

「なに、ただの帰り道ですよ。2年ぶりでしょうかね。あの時は敵襲に遭い、何もご挨拶もせず申し訳ありませんでした」

「……」

「そんな警戒なさらずとも、今は戦う気はありません」

「今は……ね。相変わらず、言葉選びは達者だな。あの時は驚いた。まさかこの世界にまだいるなんてな。わざわざとあっちの世界に逃げたんだとばかり思つてたからな」

「相変わらずの皮肉めいた言葉をひとつ。ええ、逃げてましたよ。自分の主を背後から切りつけ、この世との離別を図らせていただきましたし。まあ、その主に呼び戻されるとは思いませんでしたが。ですがあなたにも驚かされます。アルフレッドさんとマシューさん……でしたつけ? 大事な方たちをよくも手放しましたね。あなたは人一倍執着心がお強い方だと思ってましたが?」

「それとこれとは話が違うんだよ。いつまでもあいつらを、この世界に置きたくなかっただけだ」

「自分のもとでしよう? わすがのポイ捨てぶりですね。私にはまねできませんよ。それで、今日はどうして傘もわざわざにこのような場所へ?」

「お前に関係あるのか?」

「ありませんね」

「なら話す必要もないだろ」

「相変わらず口が堅いんですね。あなたのファミリーの情報はいつも情報収集員でも手を焼いてますよ」

「それはお前のところもだろ? つたぐ、偽善者ぶるのもいいかげん

にしる」

「それもそうですね。では、私はこれで失礼いたします。お忙しいと仰りますみませんでした」

そう言つて菊は踵を返して再び歩き出す。アーサーはそれを黙つて見送る。だが、路地の入口よりも手前で菊が立ち止まつた。

「私は忘れはしません。あの時の出来事を。あの時の日常を。あの時抱いた感情を。そして……私があの闇の世界を憎み嫌うようになつたのが……あなたのせいだということを……。今日はそんな気分ではありませんので何もしません。ですが次にお会いしたその時は、あなたを敵だと認識して構いませんよね？」

「自分のファミリー以外すべて敵だ」

「では」

菊は傘の下で笑つていた。予想通りの答えが返つてきたからだ。ああ。なんてこの世界は愚かなんだろう。憎んでののしつて対立して。それが無限ループする。終わることのないトンネルがどこまでもどこまでも続いていく。否、続いていくのではなく出来ていくのだ。自分たちが突き進んでいくにつれ、トンネルは先へ先へと伸びていく。何度も何度も。同じことばかり続けて何が楽しいのだろう。自分と同じ世界に生きるものを殺して、何か楽しかったのだろうか。馬鹿だ。愚かだ。そんなことをしている人間たちが愚か過ぎてあきれで笑えて来る。そう思つてしまつていてる自分もおそらく愚かなのだろう。これは他人に向けた笑い。そして、自分に向けられた笑いなのだ。そんな笑いを浮かべ去つていく菊の後ろで、アーサーはただ焦りと後悔入り混じる顔をしていた。去つていく男の脅威を思い浮かべながら、アーサーもまたその場を立ち去つたのだった。

この二人は仲がいいんですかね？どうなんですかね？  
もう書いて意味がわからなくなりましたこの二人。  
この二人は過去にいろいろあつたんです。またその話はのちほど。

♪次回予告♪

ついにそろう最後のファミリー。

ボスは静かにこれから的目的を告げる。

それがさらに闇の世界の歯車を加速させる。

すみません。

活報で、今日一話投稿するとかほやこした馬鹿がいましたが、  
どうもそつもいきません。

リアルで忙しく一話書き上げるので精いっぱいでした。  
深くお詫び＆反省し、今週は一話のみの投稿となります。

夢を見た。世界が崩れるその瞬間の夢を、僕は見た。でも片方の世界は未だ存在してる。でも僕が生きる世界は死んだ。生きる場を失つた、闇に生きる人達はみんな、路頭に迷い明日を見いだせずにいる。僕はそれが夢だと知りつつ、恐れを感じた。だつてそんな中に僕も含まれていたから。

「今一度……三つの呪われた宝玉をこの手に……」

アジトである館から、彼方を見つめるアイシーリア。白く雪の固まりのよつな宝玉は、彼の手の中で妖しく煌めいている。そこヘドアを開き中に入ってきたのは、前髪をかきあげた元気が取り柄の青年だ。

「アイス！赤い宝玉の在りかわかつたつペヨー…  
「ほんと?」

そこへ不機嫌顔のクロスのヘアピンを付けた青年が現れる。

「あんじじざい。隣の部屋まで聞こえた」  
「ノル、いい加減諦めたら?」  
「ならお前も兄ちゃんつて呼べ」  
「いやだ！」  
「兄ちゃん」  
「やだ！」

さりにそこそこ笑顔の青年と、いつも通りの仏頂面?の青年が現れる。

「まだそれ催促してるんですか？僕もお兄ちゃんって、呼ばれてみたいですね！」

「そか」

「そか、じゃないし。もう皆意味分かんない。……狂わされたこの世界の歯車を今一度、元に戻す。その為には……」

僕は何だつてする。どんなことでも。

「貴方の思い通りにはさせないよ、王耀」

この世に面白みがない。

そんなのわからないよ。

だって、僕の周りにはこんなにも

愉快な仲間がいてくれるんだ。

それなのに、そんな仲間の輪の中に入らずに面白みがないなんて決めつけるあなたのことが

僕は嫌いだ。

絶対にあなたの思惑は僕が阻止するからあなたが僕を眠らせた。

でも再び目覚めさせたこと

後悔させてあげるよ。

（次回予告）  
赤き宝玉のもと  
白き宝玉の持ち主現れて……

また危づく恐れるとひりでしたw  
この話だと菊がもう黒い黒い…  
キャラ崩壊しないことを祈りつつ書きました。

置かれた湯呑茶碗。その中には若葉色のきれいな緑茶が、湯気を立ち込めさせている。それを見つめる、アイシーリアはちらりと眼の前で座っている黒髪の男を見た。慣れた手つきで湯呑を傾けるそのしぐさには一片の乱れもない。

「あなたが来るのをお待ちしていました」

「それ、まるで僕がここへ来ることを知つてたかのようだ」「ええ、知つていた。というよりは、ある人から聞いていたというべきですね」

「それって、王耀？」

「さて、どうでしょう」

くすりと笑いながらそう答える菊。それはもう、肯定しているのも当然と見受けられる。そういうば、此処の前のボスはあの人だったなと思いだす。この人も同じだろうかそう思つたアイシーリアは、ふと菊に尋ねかけた。

「あなたも、この世界の変革を望んでいるの？」

「変革……ですか？」

「あの人はそう言つてた。この世界はつまらない、だから面白く変えるんだって。此処の前ボスはあの人だった。だから、その……」

「私も同じ意志だと？」

「違うの？」

「ふふふふ……私とあの人は違います。たとえ同じファミリーを率いたとしても、その志は同じになるとは限りません。私はこの世界がつまらないとも楽しいとも思いません。それは私にとってこの

世界がどうでもいい世界だからです。どこでだれがどうしようと、それはそれで全く構いません。もともと私はこの世界が嫌いですか

ら」

「でもあなたは、この世界に戻ってきた」

「ええ、此処には守らねばならないものがありますから、当然でしょ。私のファミリーを守ること、それ以外は特に興味も関心もありません」

「じゃあ、なぜ赤の宝玉を？」

「これ……ですか？」

そういうて、菊はスーツのポケットから赤い宝玉を取り出した。

「今、この世界では抗争が激しさを増しています。その原因はこれ。あと2つある子の宝玉をめぐり、あちこちで血が流れています。私のファミリーの一人も現在病院で療養中ですしね。こんなガラス玉一つで、傷つけられる仲間ができるなど私は我慢なりません。だからこそ私はこれを集めるのです。奪い合ひの必要がなくなればいいんですから」

「あなたはこれを破壊したいの？」

「そうもいえますね」

「？」

「私はですね、この世界を壊したいただそれだけなんですよ

菊が指定してきた対談の建物から帰る途中、アイシーリアは橋の上にいた。夜になり、漆黒に染まるその川は、水の流れる音だけで静寂に包まれていた。

「この世界の破壊……僕は……この世界をどうしたいんだろう。それに、僕はどうしたいんだろ？」

アイシーリアのその問いは、ぽつりと小さな川の流れる音にかかり消された。

「この白い宝玉は、ちゃんと見定めないと……あるべきもとく……」

南イタリア某所にある教会の屋根の十字架の上。そこに腰掛けるは、この世界に混乱を招いた男。

「お前が見定めなくとも、それはもう行方は決まっているあるよ。我が定めた運命に従つて。お前らは抗い、争い、そして狂気におぼれ、墮ちていくある。深い深い闇の底へと……特にお前ら二人は……覚悟しとくあるよ。ボス共」

お前らはすでに盤の上にいるのだから……

長いのか短いのかよくわからない長さになりました。

そして菊はやっぱりこの世界（マフィアの世界）を嫌つてますね。  
そもそも北欧のファミリー名を考えないと

↓次回予告↓

ついに、3つのファミリーが激突する……かもしれませんw  
要するに未定です。金曜日更新します。

やつと抗争編らしくなってきますね。

最近この話を書くのが難しいなと思っていたのですが、なぜだかわかつた気がします。

主人公がいない……

それぞれのボス3人にスポットを当てていますが一貫して主人公といえるキャラがないんですよ。だから難しいのかな……

ですがいまさら主人公投入するわけにもいかないので、このまま頑張ろうかと思います。

にしても終わりが見えません。

20話ぐらいで終わらせる予定だつたんですけど……

ところは章はつけてないですが、

一応最終章になつてゐることなんですかね黎兎さん？

「シリません。というかあなた誰？私だよね？」

なんてわつわとはじめましょう。

## 『争い』

それは些細なことでおこるものである。敵対する者それが相まみえただけで、それは勃発するのだ。正当な理由。そんなものはいらない。ただ己が思うままに動き、争うだけである。それゆえに、身勝手、自由気まま、思いやることなどせず。仁義も忘れ、欲深くなり、闇の中を駆け回る。獲物を狩る肉食獣のように。そのうちなる野望が眼を光らせる。何口も獲物にありつけず、飢えに飢えたそのものにはもはや歯止めも何も効くことはない。わずかなきつかけさえあればいい。広い大草原にて、その広大な土地で経つた一匹の獲物と出会い。そんなきっかけでバトルは始まる。負ければ死。勝てば飢えを逃れ、幸福を手にする。ただそれだけのこと。何とシンプルな構造だろう。

## 『願い』

誰もが抱きしものである。それを現のものにできるかどうかは、そのものの力量次第であるが。それゆえに、万人はそれぞれの願いを追い求めるのだ。それが自分の理想だから。願いをあきらめたものは屍と化す。たとえ体は健全であれど、心はすでに己にあらず。たとえ他者から見てそうは思えずとも、その者自身は渴望すらできないのだ。願うことを見失った人間は、明日すら見ていないのだ。ただ過ぎゆく時間を漂うのみ。

そしてそれは、彼らにも当たはまることだった。

南イタリア某所、廃病院敷地内。そこに似合わぬ銃声と地を駆ける足音が先ほどから響いていた。

「ほりほりーそんな逃げてばっかじや お兄さんつまんないんだけどなあ！」

「逃げてないんだぜーお前の出方を見極めてるだけなんだぜーー！こしても菊。どうこうことなんだぜーー？お前の情報通りに此処着たら『pirate』の幹部がいるとか聞いてないんだぜーー！」

「幹部は幹部でも、お兄さんは一応あのまゆ毛の右腕よ！」

「眉毛だか腕だか知らないんだぜーーどっちみちうちのボスよりは下に決まってるんだぜーー！」

「むかっ！お兄さん本気で怒ったよーー！」

「お兄さんって言つよつ爺だつペよー！」

『神龍』ボス右腕の勇珠と『pirate』ボス右腕のフランシスはひよんことからその場に居合わせ、そのまま争い始めたのだった。それは彼らの目的のためによるものだ。もちろんその目的とはあの宝玉だ。ついでに『pirate』の幹部ダンジョンが割り込んできた。

「お前は……どうこいつーと？最近めっきり話を聞かないから、『C

「roses」つてつぶれたと思つてたよ

「なんことねえっぺよ！うちがつぶれるよりも『pirate』の

ほうが先じゃねえっぺか？」

「そんなわけないでしょ！…つてうひょわあ！？」

「ちっ、外したんだぜ！」

「お兄さんが話してるときに攻撃してくるなんて最低…」

「最低？はつ……上等なんだぜ。だつて俺らはもともとそういう集まりだぜ？」

最低。それは此処にとつてほめ言葉。最低であつて何が悪い。此処では最低でいてこそ当たり前なのだから。

「じゃ、俺も混ぜるっみ？」

「なんでそつなるんだぜ？俺今、この鄙倒すのが忙しいんだぜ！それ終わつたらこしろなんだぜ！」

「何それお兄さんがやられるみたいな言い方…お前ら一人なんかお兄さんだけで十分だし！」

彼らはそれぞれの武器を手に、地を蹴つて前へと駆けだした。

前半は完全に偉そうなこと言っていますが、100%黎鬼の勝手な言い分です。正当性など皆無です。

願いをあきらめても、見失つても人は考え次へと進むこともできる。そういう生き物だとも思つてますが、あえて上記のほうを書きました。

そして勇珠 vs フラン시스 vs ダン

この人選は少し後悔します。どうせなら右腕対決にすればよかつたな……と。

でもノルが割つて入る姿が想像できませんでした。なので、あんこになつたわけです。なんでも『ペ』をつければいいと思つてないか？なんてツッコミが聞こえるけど……

あと、北欧ファミリーの名前『<sup>クロス</sup>Cross』にしました。彼らの国旗と、運命が交差するをかけてみました。

／次回予告／

傷も癒え、退院した鈴梅。そして彼女を安全な場所へ案内する獅狼。そんな彼らのもとに忍び寄る闇。

も… もうじつじつもない状況に陥っています。

ところれど、今日から週1更新になります。  
ところがもう不定期更新になります。  
書きたい話はあるんですが、書けません。

ところれど、頑張ります

南イタリア、某所にある総合病院。その入り口から一人の若者がでてきた。その片割れの少年はやや辺りを気にしつつ、足早に歩く。もう一人の少女も遅れを取らないように、少年に付いていく。あの日彼女は撃たれ、そしてこの病院に入院していた。そして今日、ようやく退院できることになったのだ。だが、彼女は今起こっている闇の世界の争いに戻ることは許されなかつた。

\*\*\*\*\*

「え……」

『今私が行つたことが、以降覆ることはありません。あなたは、私が用意した隠れ家に身をひそめてください。退院時には獅狼君を護衛として隠れ家までつけますので』『安心ください』

「どうして菊さん！私はもう、以前と変わらなくくらい元気になつたんです！」

『たとえあなたが完治していても、私はあなたを、この戦場に戻すつもりはありません』

その声はとても落ち着いていた。常時落ち着いている彼でも、その時の声はそのさりに上をいくほどに落ち着きだつた。

「私……もう『神龍』の一員じゃないんですか……？」

『そんなわけありません』

『じゃあどうしてですか！？』

「鈴梅」

「あ……すみません、菊さん」

『……あなたの気持ちはわかります。ですが私は、あなたをこのば

かげた争いに巻き込ませたくないだけです。『んな戦……。ですか  
ら』

\*\*\*\*\*

あの時、菊さんが最後何と言ったか私は覚えてない。

そんなことを思い出しながら歩いていたせいか、鈴梅は信号で止まっていた獅狼にぶつかった。鼻を押さえつつ何とか謝罪する鈴梅のほうに、獅狼は無言で振り返った。

「昨日の電話のこと、思い出した的な？」

「うん……」

「俺も菊さんの考えには賛同できる……」

「私も……菊さんがああいうのはちゃんと理由があるってわかつてるし、決して私を仲間だと思ってないってわけじゃないのもわかる。けど……」

菊が手書きで書き記した地図と向き合いつつ、獅狼は角を曲がり路地へと入る。すたれた空き地、使われなくなつたビルが建つその間を一人は進む。

「私だつて戦える。みんなが戦つて、なのに私は隠れて……」

「『』の戦いは今までとは違う。やり方も敵も、これまで以上だ。俺だつてマジやばいって思うほどだから、菊さんはきっとそれ以上のことを知つてゐる。それだからこそ、鈴梅に隠れてうつて言つたと思

う

「うん……」

「それに」

「うん……」

そこで獅狼は言葉を切った。そして後ろを振りかえる。

「獅狼……？」

「鈴梅、これ地図。なくさないで」

「え？」

「それと荷物。重いけど自分で持つてつて

「え？」

「それと……そこにはいつやつでこい的な？」

隠し持つていた拳銃を、路地の先に構える。すると、その路地の先に一人の男が現れた。獅狼よりも大柄で、白いマフラーをなびかせ、その男は徐々にこちらに近づいてきていた。

「気配消してたつもりだつたんだけどね、よくわかったね

「誰……？」

「『pirate』幹部、イヴァン・ブラギンスキ……」

「あれ、僕のこと知つてるの獅狼君」

「……鈴梅」

「何？」

「」

「でも……」  
「いいからつ……早く……」

そう叫ぶと獅狼は拳銃を持っていない左手で、さらに隠し持つていた爆薬を取り出し、素早く発火させる。その場に立ち込める爆風と煙と爆音でイヴァンの姿は見えなくなる。だがそれはイヴァンからも同じだろ？。

「獅狼……」

鈴梅は、自分の荷物を抱きかかえるとそのまま目的地へと向かって走った。その姿を目の端でとらえた獅狼は、そのまま静かに視線を前方に戻す。次第に煙が晴れイヴアンと対峙する。

「ワザと……見逃した的な？」

「さて……ね」

「何が目的？」

「ねえ、赤い宝玉持つてるのつてや……君？」

その路地に立つ廃ビルの屋上。その屋上に立つて階下の戦いの方を眺める一人の人影。

「どうなるんですかっ！？アイス君はまだ見定めてつて言つてしまひたけどー。」

「待つ……」

待つしかない。この争いの終焉が訪れるその時を

キャラが多いです。

獅狼でしょ鈴梅でしょ、イヴァンにティノにベールさん……あと菊  
もか……

てか、獅狼 VS イヴァンって私も心配です……

私絶対イヴァンは敵に回しちゃいけないと思つんだ。  
うんうん。

まあ、頑張つてほしいです獅狼君。

あと最後のベールさん超適当。

／次回予告／

因縁の戦い、それは突如始まる。  
交える刃が切り開く未来とは？

不定期はいいものの少し放置気味になってしまいますね。  
どうでももう一個のヘタリアの話を進めたがります。  
あの方がいろいろ考えずに書けるので気楽なのです。  
「つまはいろいろ設定ありますぐるんですよ。」

あの時もこんな雨降る空模様だつた。あの日、俺達は考たがえを違たがえ、それぞ別の集団に属した。

もう一度と、同じ敵に共に立ち向かうことは無いだらうと……  
だが、彼等は再び再会してしまつた。

敵として……

そうだ。あの時もたしか、雨だつた……。

雨降る中、あわや一触即発になりかけた菊とアーサー。だが何故か争うことを始めた。確かに両者とも武器を携えてはいる。しかしそのどちらもその鞘に納められた刃の姿を現はしなかつた。ただ降りしきる雨に打たれるのみ。局地的なものだらうか。彼方は晴れた空、まばゆい太陽の光りが見える。あそこにはこんな争いなど無いかのように思えてくる。

「今頃、あの子達はそれぞやるべきことをやつてくるのですかね」

「随分でかい、独り言だな」

「貴方も、貴方のファミリーに言い付けを残して來たのではないのですか？ 例えば、宝玉を奪取しろ……とか？」

「はつ！ そりやお前もだろ？」

「まああながち間違つてはいませんね。そしてその時期を予見この場に居合させていり……』『cross』のボスさんも、あの宝玉の行方を知りたがつてゐる」

「……僕は関係ないよ」

「くはないでしょ。貴方とあの人の接点の有無。そして宝玉が

動いた時間。<sup>と想</sup>そして現在のこの状況。それらを踏まえて出る結論……

パシイ！！

「背後から狙うのは卑怯……ではなかつたのですか?」

「お前……それ以上は話すなあるよ。やはりお前をこの世界に呼び戻したのは間違いだつたある」

いつもとは違う黒い中華服に身を包んだ王耀。彼が背後からけり上げてきた足を、菊は振り返ることなく、刀で防いでいた。

「あなたが、一度行つた」とを捻じ曲げてまで此處に現れたということは、あながち、私が言おうとしていたことは間違いではないと

「アーティストの心」

は、なんのことあるが、外題満たさにあは、妙な甚くいふのは相変わらずあるな。お前はわつやといの世界でも壊す算段をしていればいいある」「

「何あるかそれ」

「時は過ぎていくんです。そして時の流れとともに、人は何かを得るんです。そして、それはのちにそのものの考え方すら変えるんですよ、あなたにわかるかは、知りませんけどね」

「お前……」

「さつきからわーてれば、くそつまんねー口げんかすんならほかでやつてくれねーか? あ、宝玉は置いていつもらうけどな」

「おまえの手口は、おまえの手口だ。おまえの手口で、おまえの手口を取る」

「誰が爺あるか？」

「みんな意味わかんない。僕なんで！」にいるかすら分からなくな

つてきた

「ま、我は帰るある。ジツセモハ、ジツコヒツビタク、運命はすでに決まつてゐるあるからな」

王耀はそうこうと、そのまま姿を眩ませた。

「では、私たちもそろそろ始めましょ。私はこつまでもあなたとこのような場所で話している暇などないですからね。さうあと片付けて、あなたの持つ宝玉のありかを聞き出し、そして……仲間のもとへと馳せ参じるために……」

「それはこつちのセリフだつての。いつとくが、手加減なしだぜ？」「おや、よひしいのですか？では、私も……久々にやりますか……」

菊は抜刀すると同時に、素早く地を蹴つた。次の瞬間にはすでにアーサーの懷に入り込んでいた。

此処の菊がなんかつめたい。

言いたいことずばすば言つて、何か菊じやない氣もある。

アーサー・V・菊はどうしようか悩み中です。

どちらも強そうですし、勝敗をつけられるのか私

菊好きだから菊が勝つってわけではないんですけどね

アイス君はボス戦を見守ります。戦いはしません。多分

／次回予告／

流れる血のその先に

光があるのか

それは誰も知らない

未知の世界。

出血多量かもしけないので、『注意ください』……あくまで『かも』ですけど

引き続ぎアーサー・S菊です。  
問答無用で斬り合つてます。  
#若干だ＆そういうのは読みたくないことこの辺はおやめください。

切つ先が下からのビームに向かつてつきあげられた。それをアーサーは身をそらしてよける。ちりつとした感覚が襲つてきて、ややかすめて切り傷ができるのがわかつた。踏み込みから見失つてしまつた。気がつけば、目の前に白い刃が迫つていた。からうじて身をそらしたアーサーは、左足で踏ん張り体制を整え、菊に対して剣を振り下ろした。金属同士がぶつかり合う音がその場に響いた。普通なら耳をふさぎたくなるようなその音だが、今はそんなことをしている暇はない。降り注ぐ雨が視界を、そして聴覚をも奪つていく。それに何より、刀の軌道が読みにくいのだ。晴れていれば日光に反射した光で、どんな攻撃が来るのかある程度わかることができる。だが今日はそれがない。全く、最悪の条件だった。

だが、二人の武器は種は違えど同じ刃。状況は五分五分だった。

一瞬だけで着たすきを突いたアーサーの刃が、菊の左腕を切り裂いた。黒いスースが散り、そこから赤き血が滲んできた。だが、それ以上のすきは『えず、一步踏み出し、すぐにアーサーの脇腹を突く。反応が遅れ、アーサーの脇腹に傷が生じる。たまらずアーサーは後ろに距離をとつた。

「相変わらず……読みねーな」

「それはどうも……」

「それで何割だ？」

「6割です」

「マジかよ……」いや、俺も本気出さなきゃやべーな

「そんな」謙遜を

言葉を交わすのはそれだけ。次の瞬間には再び刃を交えた。左から、右からときには上下。ありとあらゆる角度から一人は自ら持つ刃を繰り出す。一人の力は拮抗していた。よけて斬りかかって、傷を負う。それの繰り返しだ。

ぬかるむ足場。すべる足。地に描かれた戦いの足跡。<sup>こんせき</sup>切れる息。噴き出す汗。滴る雨水。奪われていく体温。

「はあっ……やつぱ強いな。相変わらず。だからこそ俺はあの時お前を誘つたんだ」

「そうでしたね……私をこの世界に誘つたのはアーサーさん、あなたでしたね」

「昔は荒れて居やがったのに、変わったな……お前」

「人は変わるものです。時がたつにつれて。そして、多くの人と出会い触れ合うことで。ずっと同じ……そんなひとつ多くいふとは思えませんしね。私だってあなただって、変わりゆくものなんですよ」

「このまま引退しちまえよ」

「そうはこきません」

「はつ、強情」

「そうですね」

「……俺はお前を誘つたことを後悔してはいない」

「ええ、ですから私をこの世界に誘つたこと……」

後悔をさせて差し上げますよ。これからたつぱりと……

戦闘描写 o r z

残酷表現 o r z

やっぱ無理なのか？ヘタリアキャラでそういうの書くと出来ない  
んですか！？

まあ、ただ単に私の力不足ですね。あはは…… o r z o r z o

r z

♪次回予告♪

高揚する想い  
他者のために  
仲間のためにふるわれる力  
そして・・・碎かれし武器

意味わかんないし・・・

お久です。

スランプ気味ですので、これからどんどん遅くなるかもしません。  
なのに今回のお話は結構長めです。  
どうなってるんだしょい……

一方、曇天の下で別の戦いは行われていた。勇珠の振り上げる槍がダンの斧とぶつかりはじきあつ。その反動のすきを突いて、フランシスが銃弾を撃ち込んでいく。一人はそれを、武器ではじき体をひねつてよける。一進一退ともいえるその攻防は、もうすでに一時間は続けられていた。だが彼らは疲れなどまるで垣間見せることなく、敵へと立ち向かっていく。この戦いは負けることなど許されないからである。

ともあれ、ファミリーの右腕を担うほどの力を持つ勇珠とフランシス。それにダンも右腕ではないにしても、その力は勝るとも劣らない。それぞれ実力を持つ者同士の戦いは、なかなか勝利への活路どころか、敵の弱点すら見受けることができないでいた。強者同士の戦いは、一瞬で決まるか、永遠に決まらないかのどちらかだと、誰かが言っていたのをそれぞれは思っていた。この場合はどちらなのだろうか。いや、すでに一瞬なんて時間は過ぎているのだから、答えは後者の方に決まっているだろう。だが、それはそれで困るのだ。それでは何のために戦っているのかがわからない。

「あんこ、アイスがなに言つたかも忘れたのか？」

そんな状態のところに降りかかってきたその声とともに、あたりに降り注ぐ無数のあられ。もとい、巨大な電。勇珠はそれをやりではじきつつ、フランシスは銃で砕きつつそしてダンは頭に一個くらい、後ろへと後ずさつた。そしてその中央にあいた空間に、一人の男がどこからか飛び降りてきた。

「あつれー、うちの眉毛かと思ったら『cross』の右腕さんじやない? 不思議パワー使つたでしょ?」

「あんなへなちょこパワーと一緒にすんでね……」

「急に飛び込みすんじゃねーんだぜ！！」

「それは悪かつた……全部あんこが悪い」

「いつて一つペー！－何すんだノル！？」

「ボス命令違反とみなして、ここで処置してもいいんだぞ？」

「ゲツ……」

「ボス命令？」

「俺ら『CROSS』幹部に出された指示。『それぞれの戦いの方、そして宝玉の行方を見守れ』。アイスは確かにそう言っていた。

そしてあんこ、お前は一体何してるんだ？」

「いけね、つい忘れてたつペよ！」

「忘れんなだぜ」

「あんこは俺が預かるから、一人はさつさと決着でもなんでも付けろ。あんこ、行くぞ」

「待つつみペよ！－！」

空地の隅に移動した二人。中央に残った勇珠とフランシスは戦いを中断せざる終えなかつたため、しばしその場で対峙していた。ぎゅっと、槍を握る手の力を強めた勇珠はそのままフランシスへと向かおうとしたのだが、ふと槍に違和感を感じ、視線を落とした。そしてわずかに目を見張つた。槍の柄に無数の小さなひびが入つていた。そのひびに気を取られていた勇珠の耳の片隅銃弾が打ち出される音が聞こえ、彼はとっさにその槍を前に構えて回す。キーンという音とともに銃弾が地面に落下していった。

「なに？ もしかしてもう降参でもする？ 戦いの最中に敵から目を離すなつて言われてないの？」

「はつ。誰に言われるんだぜそんなこと。悪いけど戦いはほとんど自己流なんだぜ……！？」

手にあつたはずの槍の感覚がない。恐る恐る地面に視線を落とすと、そこには粉々なつた槍の柄と、槍の先端にあつたはずの刃が單独で落ちていた。壊れた。

「だつてもう、武器ないんだしさあ？あきらめなよ。相手が悪かつたつてさ？じゃ、そろそろフィニッシュと行こうか？よかつたね、殺される相手がお兄さんでわ。本望でしょ。お前を殺した後に宝玉持つてないか調べさせてもらひながら。あつたらあつたよしだし。なぐてもまあ、ほかのやつらが見つけるだらうし。『神龍』の右腕殺せただけでもお手柄じゃんね。じゃ、ばいばーい！」

打ち出された銃弾は、うつむく勇珠に向かつて飛んでいった。そして、勇珠の上半身にそれは消えた。だが、なぜか勇珠は倒れない。そして彼の足もとに異様に巻きあがる砂ぼこりと、無数の足跡。異変を感じたフランシスはさらに数発の銃弾を撃ち込む。そして今度ははつきりと見た。勇珠がそれらすべてを手で、つかみ取ったところを。

「さつときさつたんだぜ……戦いはほほ白口流だぜって……。ほほってこいつのはすべてじゃない。俺ら『神龍』幹部は全員……兄貴から拳法習つてんだぜ！」

再び顔をあげた勇珠のその瞳はまだあきらめてはいない。その瞳には光があった。

「武器なんかに頼らば、己の体を研ぎ澄ませ、一打一打に渾身の力を込めふる。まだまだ終わってねーんだぜ？」

勇珠はそういうと、真っ向からフランシスに向かつていった。

勇珠つて拳法？でいいんですかね？

空手とかカウンフーとか見ててかつこいって思います。  
やろうとは思いませんけど。

で、ダンを肅正？したノル。  
ダンを止められるのはノルしかいないだらうと…

／次回予告／

火炎のなか彼は抗う

だがその前に

死神が降臨し…

遅くなりすみません。

今回かなり残酷な描写があります。  
呼んで不快になる恐れもあるかもしれません。  
描写がそれほど生々しいかは不明ですが。

一応の注意書きです。

圧倒的な力の差というのは、こうこうつものことだらうか。徐々に追い詰められていく、その相手の顔は苦痛に満ちていた。先ほどから単調な攻撃しかしてこないところを見ていると、どうやらもうほとんど打つ手も、策もないことが分かる。だったら早くあきらめてしまえば、すぐに楽にしてあげられるのことも思える。そう思つて、笑いがこみあげてくる自分がさらにおかしい。死んだら全部終わるんだよ？ だったら死んじゃえればいいのにね。そう思いながら、その男は近くの工事現場に散乱している鉄パイプを投げ飛ばす。それを相手は何とかダイナマイトではじき、粉碎する。

「まだ抗つの？」

「ッ……当たり前的な？……」「お前なんかにッ……やられてる場合じやないから……」「

息も切れ、額からは血を流し、そう答える男はいまだあきらめてはいない。それどころか正気を掴もうと必死だ。そこまでする必要なんかないんじやないかな。いい加減僕も投げるの疲れてくるんだよね。さつさとくたばつちゃえばいいのに。

「でもさあ、いい加減もうダメだつてわかるでしょ？あきらめて僕に殺されちゃいなよ」  
「まだ死ねない……」「  
「じゃあ、いつ死ぬの？」「……」

死ねない？ 人つてのはさ、自分の死期を選べないんだよ？ それは

この世に存在するすべての生命共通項だよ。それなのに、君は何？まだ死ねないって。今死にかかるのに？死んじゃうんだよ？なのに君はまだ生きると思つていいんだ。なにそれ。

うぬぼれないでね。だつたら今現実を見せてあげる

「まだ……死ねないんだ俺は……あの人には……ツ……ツ……！」

「死ねない？死ねない？ううん、君は此処で死ぬんだよ」

放られた鉄槌は獅狼の腹に突き刺さつた。彼の体を貫通し、先端が背中から突き出す。パイプの中に切り取られた内臓は、はみ出すことなくそこに存在している。血しづきがあたりの壁や地面に噴き出し、逆流した血液は、口からも漏れる。力の抜けた足では体を支えられず、獅狼はその場に崩れた。鉄の味が広がるその口からは、苦しそうに喘ぐ声が聞こえる。鉄パイプを抜き取ろうとしているのか、わずかに手が動いている。だが、ほとんど力は入っていないようだつた。徐々に広がる血だまり。

「……ヒュッ……ハッ……あ……俺は……まだ……」

「まだなんてもうないんだよ。もう君は終わるんだからね。もう抗わなくていいように、これで終わりにしてあげるよ」

「やめつ……つく……」

かるうじて開いていた片目の視界に、振りかざされたパイプの先端が入り込む。今にも己の、それも頭部に振りかざされそうになつてゐるそれを止める力は獅狼には残されていなかつた。

「べ……べールさん……」

「待つしかね……」

「待つって……このまま黙つて人が殺されるのを見てるっていうんですか！？」

「……ん

「なんで……いくら今世界が闇に覆われてるからって……それが正しいわけないじゃないですか!! なんねアイス君は手を出さず、見守つててなんて……」

「……」

ビルの上で、二人の幹部は何もできない。

すみません……。俺もう、此処でダメみたいで。あなたには助けられてばつかだつた的な感じがします。でも俺……あなたに会えてよかつたつすよ……ボス。

「バイバイ」

「ツ……」

ズガアン

一発の銃声が響いたと思った直後、パイプが真っ二つに破壊され、折れた片方は力なく、地面へと乾いた落下音とともに落ちた。

そして、その場に新たに加わる足音が一つ。

（次回予告）

突如現れた救世主  
だが、彼の登場により  
死闘はさらに過熱する……

ゆつくつと彼は歩みを進め、戦いのさなかに足を踏み入れた。両手に携えた拳銃の片方からは、白い煙が上がっている。それがたつパイプを破壊したのだ。その彼の姿を見て、イヴアンは口元に笑みを浮かべた。

「あれ、君つてさ。もつこの世界から足を洗つたんじゃなかつたの？」

「無理やり洗わされたんだぞ。俺の意思じゃないのさ。勝手に戻つてこよつと、俺の自由なんだぞ！」

「で？ 今はどこ所属？」

「『神龍』幹部、アルフレッド・ジョーンズ」

「アル……フレ……ド？」

「相手が悪かつたね、獅狼。あんなモンスターmonster相手じゃ俺以外どうにもできないんだぞ！」

「任せて……良い的な？」

「もちろんだぞ！ いいからもうしゃべっちゃダメなんだぞ！」

自信満々のアルフレッドの言葉に安心したのか、獅狼はそのまま意識を手放した。だが相変わらず、彼は一刻を争う危険な状態である。それは、アルフレッドでもわかつた。

「いきなり現れてさあ、何人のこと化け物扱いしてるのかなあ？」

「ほんのことだぞ」

「君あれだよね。『pirate』にいた時から僕とは考えることもやることも何もかも合わなかつたよね」

「ヒーローがモンスターと共に感するわけないだろ？ へへ」

「まあ僕も君と考えが同じつて言つのはなんかいやだからね。今はお互い敵対してるファミリーにいるんだから……本気で殺しちゃつ

ていいんだよね？」

「ヒーローが負けるわけないんだぞ！」

その直後、両者はぶつかり合つた。先ほどの死闘よりもさりげに激しいようだった。一丁のけん銃から放たれる銃弾は止むことを知らない豪雨のように、イヴァンに向かっていく。それをイヴァンは器用にパイプで払い落し、ある時は撃ち返したりもしていた。

アルフレッドが『pirate』にいた時から、一人は仲が悪かつた。なにかと意見が食い違つていたり、任務で行動を共にした時も別々に行動したし、とにかく中の悪さは『pirate』の中でも突出していた。仲間同士であるのだが、彼らはまるでそうは思つてはいないようで、喧嘩もしばしばあった。そのたびに、アーサーやフランス、当時いたマシュー等が止めに入つていた。『pirate』でも一人は結構力がある方だったから、止める方にとつてはいい迷惑なのだったが、当の本人たちは知る由もなくそれは今でも続いていた。そしていま、アルフレッドは『pirate』ではなくなつた。つまり互いにもう加減する必要はない。もちろん『pirate』にいたときも手加減などしてはいなかつたが、それでも殺せはしなかつた。だが今は違う。従つボスも、目指すものも違うのだから。そう、今までとは違うのだ。

「殺しちゃつていいんだもんね」

「何言つてるんだい？ それは俺のセリフだぞ！」

二人の決着がつく時が来たのだ。

この話はどつなるんでしょう。

どじが勝てばハッピーハンドなのかとか、最後の締めとかどつかる  
んでしょう。

前回みたいな終わり方とはまた違つた感じにはしたいですね。

次回予告へ

あの日振りかざした刃

それは

すべてを断ち切つたはずだった

いつからでしょつか。私がこの世界に嫌悪感を抱き始めたのは。

私がこの世界に足を踏み入れるきっかけになつたのは、ある一人の人物との出会いでした。はじめ私がこの世界で所属したのは、今現在所属している『神龍』でした。といっても、まだそのころは今のように巨大でもなく、メンバーも戦えるという条件が備わつていたのは私を含めて二人でした。そう、当時ボスで創立者でもあつた王耀以外は、とても戦いに参加させられるような年齢ではなかつたのです。その頃の私はどちらかといふと武器を使わず、己の身だけで戦っていました。ですがなにも、武器を持っていなかつたわけで戦つていました。自分の部屋のクローゼットの奥底に、ずっと封じていた一本の刀。ですが、それをもう使わないと固く決意していました。

私がマフィアの世界に入る前、私はとある不良と出会つていました。今となつては彼に関わったために、この世界とも縁ができてしまつたと言えるでしょう。その当時私も彼もまだ学生で、よくある不良のチームでともにあほらしいケンカに明け暮れていきました。もちろんその時も私が刀を持ち出すことはなかつたのですが、学生というものは浅はかな知識しかなく、平然と刃物などを使用していく、小さなマフィアの抗争そのものでした。私はだんだんそれに嫌気がさし始めました。そして、その不良の彼に抜けたいと告げました。それが引き金となつたのか、なぜか私は彼とケンカしていました。どちらもそのチームでは1・2を争うほどの強さだと言われていたせいで、なかなか決着というものは付かず、私はすきを見て逃げ出し、その世界すべてからも逃げのびた、と思っていました。

そう、私の前に王耀が現れるまでは……

「お前あるな？ 巷を騒がせてた不良チームにいたのは」

「誰ですか？ それに、何のことでしょう？」

「今はそこから足を洗って、図書館の同書あるか…… ずいぶんな変わりようあるな」

「私がどんな職に就くことに、見ず知らずのあなたからどういひ言われる筋合いはありません」

「マフィアの世界に、来る気はねーあるか？」

「なぜ？」

「お前のその考えは我的ファミリーに必要だからある」

「考え？ 一体何のことですか？」

「あの男を憎いと思つたことはねーあるか？」

「あの男？」

「アーサー・カーランド」

「つー……さて、だれですかそれは、存じ上げませんが。すみませんが、これから本棚の整理がありますのでこれで」

「あいつが、マフィアの世界のとあるファミリーの時期ボスに決まつたと聞いても？」

「……まだあの人は、誰かと争つことを望んでいるんですか……」

なぜ？ あんなことを繰り返して、その先にあるものなど、むなし気持ちはだけだろうに。勝つたとしても、傍らには傷ついた仲間の姿があるのなら、気持ちが晴れることなどないのに。スポーツの試合で勝つのと、抗争で勝つのとでは違いがありすぎるのに。そして、それをわかっていないわけでもないだろうに。当時の私はそんなことを思っていた。

そんな彼をこの世界から立ちなおさせるのなら、私は王耀の誘いに応じ『神龍』に入りました。しばらくは、抗争に参加する気も起きなかつた私に、王耀は3人の子供の面倒を押しつけてきました。任勇珠、鈴梅、劉獅狼の3人です。彼らはまだ、成人するには程遠

い年齢で、私にはなぜ彼らがこの世界にいるのかすらわかりませんでした。しかしのちに彼らが孤児であることを知ったのです。それも、マフィアの抗争により、親も親類も死んでしまったからだとうことも。

それ以降、私は抗争に参加するようになりました。彼らのような子どもが増えるのを少しでも減らしたいと思ったからです。ですが、私が抗争に参加することで、孤児が増えないとも限りません。むしろ悪化してしまうかもしれません。ですが、この闇はびこりし世界からマフィアがなくなれば、良いのではないかと思ったのです。いつになるかはわかりません。ですが、いつか来るその日に向かって、私は戦つていこうと思っていたのです。

「なあ、菊。全部のマフィアを、一日で根絶やしきしないか?」

そういう彼が私の前に再び現れるまでは……

（次回予告）  
回想する菊  
交差する思惑  
苦惱の末の結末とは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8686v/>

---

ヘタリアン・マフィア?

2011年11月27日16時53分発行